

中島広足往来抄(二)

白石, 良夫
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/16295>

出版情報 : 文献探究. 4, pp. 4-13, 1979-06-03. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

中島廣足往來抄(二)

白石良夫

凡例

- 一、広足の交友関係の知れる資料を、未刊・既刊を問わず、細大漏さず扱うことにする。ついでには、筆者の未知の資料を御教示いただければ幸甚である。
- 一、各資料には各々の性格があるので、一資料につき一項目を立て、その資料中にある人物名を見出しとして掲げ、「一」「二」「三」……と番号を付す。
- 一、資料によっては多数の人物が含まれるものがあるが、その場合には小項目を立て、①・②・③……と番号を付す。
- 一、見出しに掲出するのは、当該資料に表われる、広足と交友のあった人物である。人名は勿論のことであるが、寺社や未詳の号にまで及ぼす。
- 一、人物の閲歴等は、初出の箇所で極く簡略に述べるが、新事実が発見されれば、その都度採り上げて行く。

一、資料別の叙述の欠を補なうため、人名索引を、毎回の末尾に付すことにする。

一、資料の引用は原文のままであるが、濁点・句読点、及び必要と思われる括弧は、私に付す。

〔三(承前)〕近藤光輔・岡部春平・植

林公足・みす子・本間素当・大石

真磨・内海真道・長瀬真幸・吐月

亭・和田敬足・上野光考・横田敬

正

22 近藤光輔・岡部春平・植林公足

光輔に贈るせうぞこ

日にぞへていと寒くなり行ころほひ、たひらかにおはしますらんこそうれしけれ。さるは先づ日、おもほえずたいめたまはりて、おもふこともかたみにくづし出づるより、

隔てなき友とむつひ聞えさせ候も、うちつ
けになめしとやおもほしけん。あまた、び
のまどろの中にも、ことにかの催馬楽つく
り出候よこそ今にわすれがたう、ひとり吾
みのみやらるれ。五日の日わかれまつりて
よりほどもなくたち出侍りつるに、やかみ
までは春平・公足おくりもの^来して、いとを
かしたひねなりつるを、六日の日よりい
とさうくしき道になん侍り候。されど海
山もつ、みなくこえて、いにし九日のひる
つかたに山里にはかへりつきぬるを、あそ
の山^{み雪}風さえわたりて、あらましき軒ばの山
風につけても、まづ其御あたり恋しく、う
つみ火のもとにかのあかざりしなごりの御
まどろし給ふらんには、うら風のさむけさ
もわすれ給ひぬべし。こゝは山かたつける
わたりにて、とひくる人もなければ、冬の
日をだにくらしがたうし侍るを、春まぢつ
けてとく出たち侍らんとなん、今よりおも
ひいそがれ侍り^る。先つ日の御よろこび聞え
まほしう筆とり侍りつれど、やがて硯さへ
氷りぬれば、かきさし侍りぬ。よろづはつ
きくくのたよりに聞ゆべし。あなかしこ。

いほへ山隔つる遠にかへりても心はよせつ
玉のうらなみ (ニ一オ〜ニ一ウ)

十一月十八日と二十九日との間にあるが、次
項の消息文の日付が十一月十五日であることか
ら見て、この消息もその頃認められたものであ
らう。広足はこの年十月に初めて長崎に行き、
十一月五日まで滞在していた。その時の日記『
夢路日記』⁽¹⁾からは、光輔・春平・公足らとの
親交が詳しく窺われる。広足が光輔と初めて「
たいめ」したのは十月十八日。「催馬楽つくり
出候よ」とは、十一月二日に光輔宅で春平らと
詠んだ歌に「寄催馬楽恋」という題があるので、
このことかと思われる。五日に長崎を登って九
日に熊本に帰った記事は『夢路日記』と一致す
る。即ち右消息は、広足が熊本に帰ってから光
輔に到したものの控えである。

近藤光輔は長崎会所の役人。通称半五郎、又
羊蔵とも⁽²⁾。夜雨庵と号した。天明元年生れ。
広足より十一歳の年長。初め本居宣長の門に入
り、宣長没後は大平・加藤千蔭・香川景樹らに
学んだ。青木永章と並んで、長崎に於る広足の
最も親しい友人である。天保十二年没、享年六
十一。家集『夜雨庵集』は広足の校閲になる。

岡部春平については、夙く朝山暗・小島常世氏の研究があり、近くは岡中正行氏に論考がある。諸氏の業績に拠って春平の伝をまとめると、以下のようになる。本姓は大江氏であるが、岡部・松田・淡江氏も名乗った。通称は伶太郎・蔵人・小四郎・葛根堅室と号す。又のち名を東平と改めた。寛政六年の生れて、広足より二歳年下。初め朱子学の徒であったが、文政四年七月に広足と相知つてから国学に専心するようになった。のち仕官して石見・陸奥に住んだが、晩年は浪人して京・江戸に住み、西田直養・長沢伴雄らの温古会のメンバーでもあった。安政三年十二月二十六日没、享年六十三。前記『夢路日記』に拠れば、春平はこの年文政五年春より長崎に住んでおり、広足の長崎行きも彼に誘われるところが大きかったのである。植林公足は、長崎に於て広足と頻繁に交っているが、伝未詳。

23 みす子・岡部春平

みす子におくる

いと寒きころほひ、たひらかにおはしますこ
そうれしけれ。春臣つゝ、みなくて、いにし九
日にかへりつきぬるさまは、せうとの君、又
春平へくはしう聞えつるが如し。先つ日とひ

まつりつるをり、いとねもごろによろづ
御ころ深うあつし給ひしよ、今しもわすれ
かたう、うれしうなん。此御にろこび、せの
君にもよく聞え給ひてよ。かのたまひつる之
みしの酒は、母なるものにまづたうべさせつ
るに、いとめづらかにて、いといたうよろこ
ぼひ侍りぬ。又かのにほひのものは、其御あ
たりしのぶつまとなし侍るも、中々にてなん
春た、は、とくたちいで、御あたりとひまつ
るべし。いもうとの君にもよく聞え給へかし。
あなかしこ。

霜月十日あまり五日の日(ニ一ウーニ

ニオ)

前項と同様、長崎より帰ってから到した書信である。みす子は未詳であるが、前記『夢路日記』に拠れば、十月六日に広足・春平らと歌を詠み合ひ、同二十九日には、広足がみす子の家を訪れてゐる。「せうとの君」「せの君」「いもうとの君」、未詳。「母なるもの」は広足の母、この年四十八歳を。

24 本間素当

廿九日、もとまさにいひやる
さ、のはのさやくよころの山風にあれ行いほ

をおもひやらなん

(ニニオ)

十一月二十九日。

25 本間素当

もとまさにいひやる 十二月四日

さゝのやはあははてにけりむかし君雪にとひ

こしおもかけもなく

いかばかりさむきとかしるかきみだけ雨うち

しぶく軒の山風

(ニニウ)

26 大石真磨

よべより大石まゝろに家にやどりけるに、

つとめてきくに、となりのかたに雪をは

くおとのすれば、

(ニニオ)

あとつけてかへるもをしきあけほの、み雪を

ばたれか、きはらふらん

右を含めて六首並ぶ。この前の歌の「十二日の

あした雪ふれり」という詞書からして、「大石ま

ゝろが家にやど」つたのは、十二月十二日の夕方

から翌朝にかけてのことである。真磨は熊本藩士。

名は初め素直、のち長龍。通称十郎右衛門。鳳兮

と号す。寛政二年生れ。広足に長ずること二歳。

肥後の旧記を蒐集して『肥後古記集覧』三十五巻

を編輯した(三)。天保八年八月二日没、享年四十八。

27 内海真道

しはすつごもりによめる

としとのみおもひしものをかくしつゝうき

事さへや身につもるらん

(ニ四オ)

右を含めて短歌五首と長歌一首が並び、左註

に、

こは内海真道がもとにて酒のみけるついで

によめるなり。

とある。文政五年最後の詠である。内海真道は

未詳。

28 本間素当

もとまさがとひ来つるに、「鶯のなく声

すなる山さとに問来てこそは春をしりけ

れ」といへるに、

きはやす君しとはずば鶯の春のはつ音もに

ほひなからん

(ニ五オ、ニ五ウ)

右を含めて四首並ぶ。二十五丁オモテから四十

二丁ウラまでが文政六年の分である。右は正月四

日と六日との間にある。

29 本間素当

素当にいひやらんとして

しま辺の岡への桜吹しより君よぶことり朝よ

ひになく

(ニハウ)

右を含めて三首並ぶ。二月十二日と三月中旬と

の間。

30 長瀬直幸

ことし大江戸に とおもひ立つるを、や
まひにかゝりて道よりかへりぬ。かくて
三月廿五日、長瀬氏の旅だちをおくる。
東にてまちえんとこぞおもひしかなほこ、
ながらわかるべきかな
はるくにおもひたゝれし東路を君に行へ
になして立つ、 (二九ウ)

詞書は、広足がこの年二月に江戸に行こうと
して、途中で引返したことを言っているであ
る。真幸が江戸に発つのは、藩主斉樹公の随
伴としてであり、一行が出發するのは二日後
の二十七日であった。

31 吐月亭・和田徹足

五月一日、吐月亭にて和田伊豆足をわ
かる。
| につどひて、 | が八代の城のも
リべに行をわかれをしみけるついでに、
たちばな
かけともの遠き、国よりうつしうゑて南の関
にかざる橋 (三〇ウ)

以下、「あやめ」「夏草滋」「瞿麦」「さゆり」
の各題で詠じた五首がある。

32 上野光考

和泉国上野光考がこふまゝに、しをり
によみあはせてかける。
もろこしの遠きさかひはふみも見じ神代の
道のしをりたづねて
書紀の講説をきゝて、上野光考に贈る
歌并短哥
(長歌省略)
反歌

立かへり来てもをしへよ本つ国本つこゝろ
のやすらげき道 (三一オ〜三三オ)
五月一日と五日との間。「上野光考」の左空
白に、「和泉国日根郡雄郷金熊社神司」とある。
33 大石真磨

大石真磨宅小集。五月五日。
籠
ますつらをのさつ矢の幸となりけり木ぬれ
もとむる嶺のむさゝび
ますらをのさつ矢のがれて高まどのすその
におつる嶺のむさゝび (三三オ)
以下、「雀」「鯛」「雷」「網」「みをつく
し」「洞」「松」の各題で詠じた十二首がある。

和田嚴足

和田伊豆足が詞にこたふる文、おなじく歌
つばらかなる御あげつらひ、あまた、びかへ
さひよみて、いささか其御こたへを聞えまつる
也。まことに此とし月、月花のみやびのむしろ
にむつび来つる人々の中にも、ことにおもふこ
ろ隔ざりつるは、又たれかは侍らん。しかは
あれど、歌よむことにおきては、友といふべき
際にも侍らぬを、いみじくほめたまへる御こと
もはいとおもなきわざにて、中々にこたへま
つるべきことはも覚え侍らぬ物から、おのれは
た其よしいさゝかあげつらひ侍らん。そもく
今のよにしていにしへの意をさとり、高きしら
べをうたひ出人ことは、いともくかたきわざ
にて、人のあとをふまざるなんあらざるべき。
しかるに君ひとりおもひおこして、万のことは
はのふりよりも今一きはおもひあがり、ふるこ
とふみ・やまとふみの中なる、かけても及ばぬ
すぢをやがておのが物として、いとたはやすく
よみ出られたるは、いにしへ今にたぐふ人もあ
るまじく、いとめづらしくすしく、あかたの
・すぢのやの大人たちも、いかでかこをめでら
れざるべき。それが中にも、先つとしよみ給へ

りし落葉の御歌「つきかえに風吹わたる云々」
又儒者といふ題にて「春鳥の云々」、これら御
こゝろしらべのたかく、をしく、みやびな
る、つねに人にかたり出てめて侍るなり。な
ほ近きころよみ給へるには、たへなる御歌ど
もいとさはにうけ給はりて、明くれによみあ
ひはひめて□つかへり侍るなり。さればおの
がごときは、いたづらにいにしへをたふとむ
のみにて、よみ出る歌のいやしくくだれる、
何のをかしきふしか侍らん。さるはみな、あ
がたぬ・はぎぞの・にしごりのや・あやのや
などのあとをふみて、みな人のいひふるせし
意詞のみなれば、此里あたりにてたま／＼人
のめづらしとするも、都あたりにては大かた
の人にだに見すべうもあらず。かの拳給へる
二うたはことにいとわろき詞づかひにて、此
六とせ七とせさきつとし、今よりもまだうひ
く／＼かりしほどのすさひなれば、かく取出
給ふたに、いとおもなくこそはべれ。かばかり
いまだしきうたは、たれもいとやすくよみ出つ
べきことなれば、なか／＼におもてふせなるわ
ざ也かし。君の御歌は此さとあたりはさらに
もいはず、みやこの人もめづらかにたぐひな

しとぞおもふべき。されば後のよにつたへたら
 人にも其御心のたかき物にもまきれず、いちじ
 るくしも見えぬべし。かゝるをこそますらをの
 こゝろとはすべきわざには侍けれ。されば其高
 き御こゝろしらべをつねにしたひ聞えさせ、か
 つはみづからのこゝろをみがくたよりともし侍
 りしを、こたひかくおもほえず松之の城のもり
 べにまけられて、ことさらにうつろひ給ふなる
 は、月花のみやびのむしろの光うしなへるこゝ
 ちして、いとくちをしく、こゝろうくなんおも
 ひなげき侍り。さるは、とじ君をはじめてわこ
 ごの君たちのなげき給ふらんさま、おしはかり
 きこえさするもむねいたくなん。されど何因か
 り道隔める里にも侍らず。おなじくのののうち
 なはては、こはだのとに馬はなくとも、一回の
 うちにも行かへりつべきほどにしあれば、何か
 さは月日隔つるおほつかなさもあらましとはお
 もふものから、立わかれないむことはなほいとま
 もの、かきり也かし。さて、「月花のなからんさ
 とを」とのたまへるに、
 二 ひとりのわがのこらんさととはなかく、月に月花もな
 きこゝちしてまし
 また「かい汁の池は」とあるに、

友と見んか、汁のいけのおもかげをかけてや
 とほく恋わたるべき
 「かかすてのこれ」と侍るに、
 二 もとの杉ならませばふる川のおなじなぐれ
 にまたもすまゝし
 又おもひをのべ給ふ御歌につけて、おのがおも
 ふこゝろをのぶる歌、
 一 八代の白髪山にもゆる火のあかきこゝろをま
 はめつくさね
 八 いつしかと君をまつ江の城をまもり心つとめ
 てはやかへりませ
 五 もゆる火のあかき心は松江のうみ八重白浪も
 立かくさめや
 七 八代の沖つ浪ほのほどもなく立かへりこむ君
 にやはあらむ
 四 ともる火の因、ろあかくばますらをの行とふ
 道にたゆたふなき汁
 六 てる月のさやけき君がまこゝろをおほひはア
 めや天の八重雲
 二 たれか又うたふこゝろを聞しらんおもふこと
 のを今はたちてん
 三 今よりはまれにもあはじ八へむぐらわがしは
 のとをどちもはてなん

三月花のなからん里をたづぬらん君をはざらはざらにははたづねん (三四オ〜三五ウ)

五月十一日と十四日との間にあるが、この時のものかどうか。文中「つきがえに風吹わたる云」「春鳥の云」の歌二首、及び「あやのや」については未詳。「松之の城」は八代城のこと。「月花のなからんさとを」「かぶみの池は」「かれすてのころ」は、厳足が八代に移る時広足に贈った歌で、「月花のなからむ里をなかく」にまぎてすまゝくおもほゆるかも」「わが影を友と見るがね八代のかぶみか池はあせずもあらぬか」「くしろつく手野の神杉ひともとはかれすてのこれ手野のかみ杉」の三首である。

㊦横田厳正

郭公声類 横田勸進

ほとゝぎす過行こゑの手枕をはなれぬほどに
又来鳴つゝ (三六オ)

右を含めて四首並ぶ。五月十一日と十四日との間。「横田」は横田厳正かと思われる。厳正は熊本藩士。通称勘左衛門。川別と号す。寛政二年生れ。広足より二歳の年長。真辛に国学を学び、令に深く通じていた。歌は万葉調を好み、又、尚古趣味の癖があった。致仕後、剃髪して西寂と称す。

弘化三年正月十五日没、享年五十七。

㊧本間素当

七月、素当が子うしなひけるにいひやる。

物ごとになぐさめかねしいにしへになしても君がこゝろをぞおもふ (三六オ)

右を含めて五首並ぶ。(この項未完)

【註】

1 自筆本。国会図書館所蔵。文政七年の『夢路日記』(『中島広足全集』第一篇所収)とは別物。

2 鈴屋『授業門人姓名録』(追加本、寛政十二年。『本居宣長全集』第二十卷所収)

3 朝山皓氏「平田大人と大江春平——大江春平は平田大人の門人か——」(『国学院雑誌』三十八卷八号)・小島常世氏「国学者大江春平伝」(『国学院雑誌』四十五卷六・八・十二号)・岡中正行氏「岡部東平伝ノート」(『耕人』第六・七号)

4 弥富破摩雄氏「中島広足」所収「中島家々譜」

5 写本。文政四年序。熊本県立図書館所蔵本には欠巻あり。同館上妻文庫所蔵本によって補

6 二月二十六日熊本出發、三月九日熊本着。
紀行文『舟路のなやみ』（『中島広足全集
』第一篇所収）
7 『続肥後先哲遺蹟』卷七、「長瀬田廬」。
8 『熊本藩年表稿』に拠る。
9 弥富氏『和田巖足とその家集』三七〇三九頁
・一三〇頁。同書には、広足の返歌三首の外
に、「月花の」「てる月の」「もゆる火の」
の三首を載せる。

【索引】

ア	青木永章	〔二〕	
	井芹某	〔三〕	15
	芋栗園	〔三〕	11
	上野光考	〔三〕	32
	内海真道	〔三〕	27
	大石真磨	〔三〕	28 33
	岡部春平	〔三〕	22 23
	岡松某	〔三〕	8
カ	河上健雄	〔三〕	3
	木山直秋	〔三〕	2
	近藤光輔	〔三〕	22
サ	浄土寺	〔三〕	16
	浄妙院某法師	〔三〕	13

タ 高本紫溟

竹林某

知足寺

吐月亭

ナ 長瀬真幸

榎林公足

ハ 藤崎宮

本間素当

マ みす子

明円寺

ヤ 本居大平

横田巖正

吉永直雄

吉永秀雅

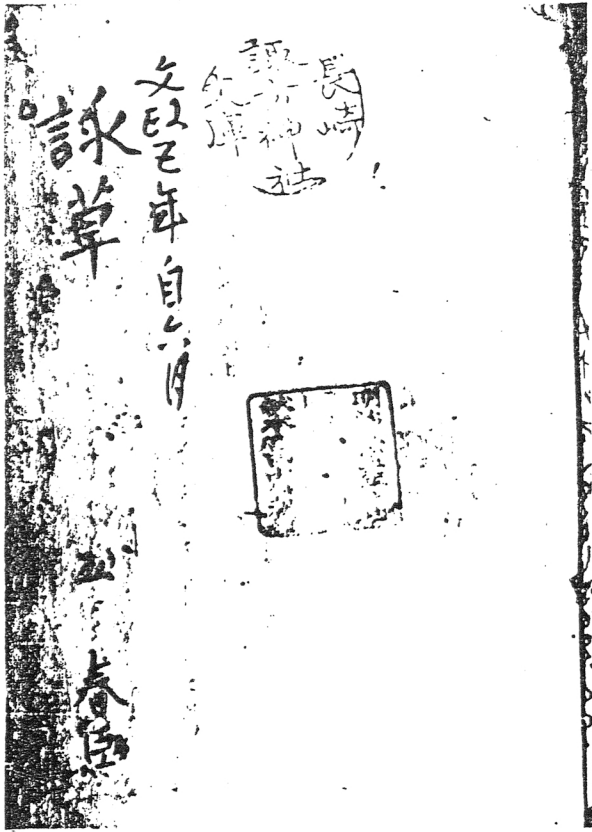
ワ 和田巖足

和田亭

【前回の正誤】

一 五頁上段13行目「あらかた」は「ありかた」の誤。
一 八頁上段12行目「野城の浦わたり」は「野坂の浦
わたり」の誤。
一 誤りではないが、一三頁上段1行目「明円寺云々」
の「云々」は、『詠草』にどうあるので、筆者
が私に後を省略したわけではない。（ママ）の印

		〔三〕	7
		〔三〕	17
		〔三〕	9
		〔三〕	20 31
		〔三〕	18 30
		〔三〕	22
		〔三〕	13
		〔三〕	6 10 14 24 25 28 29 36
		〔三〕	23
		〔三〕	12
		〔一〕	〔二〕
		〔三〕	35
		〔三〕	4
		〔三〕	5
		〔三〕	1 15 21 31 34
		〔三〕	19



(『自文政五年
至同七年 詠草』一丁表)

- を付しておくべきであった。
- 一 一四頁上段19行目「万葉集」は「万葉考」の誤。
 - 一 一四頁下段5・6行目の註の番号(26)は(31)の誤。
 - 一 一五頁下段3行目「和田巖足とその家集」は「和田巖足と其の家集」の誤。